



# 余韻



顕木 誠



『ハイヒールは、額にキスされたことのある女性が発明したものである』

卒業式と二次面接がバッティングしてしまった。訪問先を出て携帯電話の電源を入れるとすぐセンター預かりになっていたメールが届いた。添付されていた写真の中央で、証書を胸に抱えて友人とピースを並べる先輩が笑っている。僕が贈ったピアスをしていた。それから地下鉄に乗らなければならぬ僕は、電波が届かなくなる前に少し悩んでから一言だけ返信を打った。おめでとう。

地上に戻ると追いコンの誘いが届いた。スーツを脱いでから行くべきか悩んであることを伝えた。先輩はスーツで来なさいと言う。一張羅がビールまみれになったらどうしようかと思いがら、私鉄に乗り換えた。

会場は後輩の部屋だ。チャイムを押しても誰も出てこないの、勝手にドアを開けると寝もたけなわで、リビングから出てきた江田が僕に気づいて奥に叫んだ。橘田きつたが来ましたよ。とたんにどたどたと足音を立てて先輩が飛び出してきた。三段跳び

の要領で僕に飛びついて、僕は玄関先にレジ袋を落として大きな音を立ててしまった。たぶん何缶かへこんだと思う。脱いじやったんですね袴。ワンピースだったので一応聞いてみた。遅いよ、でもあとで写真いっぱい見せてあげる、ねえ見たい？

江田が近付いてきたので、はいはいと言って切り上げた。

肩にぶらさがる先輩を引きずったままリビングに戻ると十五人前後の連中がつまみのピザを囲んで酒を嘗めていた。軽く挨拶して遅刻を詫言っていると、肩の先輩がいきなり腰でも砕けたように、床にのびた。僕は隣に座りこみ、座布団を折って頭の下に差し入れる。プラスチックの使い捨てコップを差し出す手に振り返ると河相がいた。河相には一週間前に好意を告白されたばかりで、わずかに緊張しないわけにいかなかった。

お疲れ。  
お疲れです。

卒業式どうだった。一次会とか。

河相がビールとウーロン茶を持って首を傾げるので、ウーロン茶を貰った。プラのコップに小さくて透明な泡を浮かべながらウーロン茶を注いで、河相は、すごく盛り上がりましたよと

言って笑った。僕が買ってきたビールは端からプルタブを開けられて、あびるように消費されていく。泡ばっかじゃねえか、とか怒鳴られた。

なんか信じられないな、せんばいたち、みんな卒業なんて。河相が僕の傍らで目を閉じている先輩を見ながら小さな声で言った。河相はまだ一年だしな。一人くらい留年すると思ってた？

正直、と言って河相は笑ったようだった。僕は先輩の普段と違うアイシャドウの色を見ていた。

わたしせんばいに喧嘩売ったんですよさつき。河相が冷えたピザをいくつか取り分けて戻ってくると言った。なに言ったの？ 冷たくなったチーズはぶつりと切れて、サラミもゴムみたいだ。河相はプラのコップを手の中に包み込み、先輩は自分より年下の女はみんな馬鹿だと思ってるでしょって言ったんです、と呟いてから、しくじりました、と笑った。

かわい、と呼ぶ声にすつと立ち上がった彼女は、また、と言って輪の中心に入ってしまった。壁に寄り掛かり、談笑を遠くに聞いていると、腕が伸びてきて胡坐をかいた僕の脚に触れて、頭が膝の皿に押し付けられた。先輩はしばらくそうしていて、それからもぞもぞと何か呟いてから顔をそむけてしまった。

少しサークルから遠ざかっている間に、新入生たちがぼちぼち顔ぶれを固め、いつのまにか打ち解けていく。ある晩、活動後の飲み会から顔を出したら、名前も知らないような新入生か

ら名指しで相談を持ちかけられたので、若干腰が引けたまま、煙草を買いに行くふりをして飲み会を抜け出した。新入生は福嶋と名乗ってから、いまさらもじもじと僕の三歩後ろを歩いて、それから河相のことを訊ねてきた。

河相？

呆氣にとられて聞き返すと、付き合ってるんですか、と言うので首を振る。いや、只の後輩だよ。福嶋はすでにもう申し訳なきような顔をしていた。誰が言ったのそんなこと。福嶋は言葉を濁し、誰が言ったとかじゃないんですけど、河相さんよく橘田さんのこと話してるからそうなんじゃないかって話になつて。

それで、そんなこと聞いてどうするの。これは意地悪だったかな、と僕は後悔した。福嶋は目に見えて動揺していて、それからやけに男らしく、河相さんに一目ぼれしました、と言った。僕は噴き出したけど、鼻をすすって誤魔化した。

帰宅してから、僕は福嶋のアドバイザーにされたみたいだ、と何気ない調子でメールに書いた。一日に一回、遠くの先輩のPCアドレスにメールを送る。その日の夜のうちに、先輩からメールが返る。たぶん、ネイルのリムーバーでも使いながら、文面を考えているんだろうなと思っている。その日は僕が寝るまで返信がなかった。

朝方にふとのどが渴いて目を覚ますと、新着メールに気づいた。送信時刻は三時を過ぎていた。こんな時間まで起きていて

仕事に障らないかと心配になる。叱っておかなければならないと思いつながら無題のメールを開くと、一言だけ書かれていた。ばかなの？

なんだろうそれは。ばかなの？ できるだけ丁寧な、馬鹿かもしれない、それはともかくなにか気にするようなことを言った？ と書いた。呆れたことに、すぐ返信が来た。寝ていないのかもしれない。

河相ちゃんは策士。でもそういうやりかたわかってないから泰輔もばか。

とにかく寝ないと怒る、とだけ僕は返した。

僕のいないところで、河相が僕についてどんな風に話しているかは知らない。けれどそれはなにも知らない後輩の誤解を招くようなものだったわけで、そして河相はそういうふるまいに自覚がないということはないだろう。僕はちつともわかってなくなんかないのだ。先輩はそのへんをわかっていないのか。いや、本当はわかかってないって言ってみただけだろうなと僕だつてわかっている。みんなわかかってやっているのだ。

そこまで考えて、過剰な自信に少し恥ずかしくなるけど、それだつて結局ポーズか。

江田は河相が変わつたと言う。僕のせいだと言う。

僕の所属する研究室に、江田が顔を出していたので何しに来たのか尋ねると、先生に院試のことで相談があつたのだ、と言

われた。そのまま食堂に連れ込まれ、一緒に昼食をとった。江田がカツカレーの大盛りをわしわしと食べる様子を、僕はすうどを吸いながら見ていた。

はんばな振り方をするからだよ。  
はんばなことをしたつもりはないよ。

給水機で汲んできた湯飲みが冷水が、わずかに表面を震わせているのを見ながら、僕は自分が貧乏ゆすりをしていたことに気づく。

付き合ってる人がいるからとか、付き合ってる人がいなければ考えるって解釈もできるじゃん。

拡大解釈過ぎるだろ。河相はそんなに自分に都合よく考えたりとかしないと思う、と僕は反論した。確かにものわかりいいけど、でも、勘もい子だから橋田が自分のこと憎からず思っていること察してるんだろ、と江田はスプーンの先で福神漬けをつぶして言った。

別に期待させるようなことを言ったおぼえない。

じゃあおまえも先輩と別れたら、河相と付き合うかもとか考えたこと一度もないの、と江田がとんでもないことを言い出したけど、もちろんそういう可能性だつてないわけじゃないことぐらいはわかっている。そうか、そういうふうにわかっているだけで、言葉になつてなくても伝わってしまうのなのかもしれない。

河相は外堀から埋めるようなタイプじゃないと思つてたけ

ど、そういうところが変わったなあと思うわけ。

僕は策士という字面を思い浮かべて、また少しだけ落ち着かない気持ちになつた。

そして夏休みが明けて、就職先も決まつた僕がサークルを覗く頃に、河相は福嶋と付き合いはじめていた。照れ臭そうに報告する福嶋の傍らで河相はにこにこしていた。僕は、おめでとうと言つた。僕の纏う戸惑いの雰囲気、河相は察しただろうか。そしてそれを、どう解釈するのか。

その日の飲み会の締めになると、夏休みに買つて使いきれなかったという花火を消費しようと、ひとけのない河原まで歩いた。未成年の連中も、すっかり自分のアルコール耐性を把握したらしく、誰もが、少し浮かれて足もとの怪しい他に、飲み過ぎている奴もいない。上級生が、あんまりきやあきやあ騒ぐと通報されるぞ、と脅している。

引きずられるように、僕はビール缶を片手に列の後ろを歩いていた。先頭集団の中で河相が立ち止まり、こちらを見ていることがわかつた。徐々に近づくと、登つていた歩道の縁石から降りて、僕の傍らを歩き始める。

調子はどうですか？

悪くないよ。

内定おめでとごさいます。

ありがとう。

それから目前に迫つた文化祭のことなんか話した。例年通り大判焼きの屋台を出すかたわら、安眠室なる企画を立てていることを聞いた。前夜準備で完徹した人たちがターゲットです、布団さえ用意できれば元手がゼロですよ、と河相が説明する。くだらないなあ、と言つて僕はすいぶん笑つた。

先輩とはどうですか。

うん、変わらないよ。

そうですか。

河相はまた縁石に乗つて、ふらふらと、やじるべえのように伸ばした腕でバランスをとりながら進んだ。危ないから降りるように言つと、わずかに僕より上の目線のまま、よかつた、と笑つた。常夜灯の橙の光が河相のわずかに上気した頬に落ちて、細めた目の奥では瞳がきらきらと光っている。僕はなんと言えないのか、よくわからなかつた。

先導する連中が土手を降りて、橋桁の下で花火を広げる声がある。橋の上まで辿りつくと、河相は僕を見てから、両手に火のついた花火を持ってコマのようにまわりはしやぐ福嶋を指差してみせ、あほですよね、と言つて笑つた。僕はなにもわからないふうに笑つた。ただ、早く帰つて先輩に送るメールの文面を考えたいなと思つた。